

第1回 福岡市緑の基本計画検討委員会 議事要旨

1 日時

令和5年11月20日(月) 10時00分から 12時00分まで

2 場所

エルガーラホール7F 多目的ホール1

3 出席者

朝廣委員、猪野委員、今井委員、耘野委員、大寶委員、梶田委員、小島委員、佐藤委員、勢一委員、西川委員、バート委員(オンライン参加)、藤田委員

4 会議次第

①開会

住宅都市局長より挨拶

②委員紹介

各委員より一言挨拶

③委員長、副委員長の選任

委員の互選により、委員長に朝廣委員、副委員長に西川委員を選出

④議事

事務局より、資料3に基づき内容を説明

⑤閉会

公園部長より挨拶

委員からの主な意見

○福岡市基本計画、その他関連計画との整合

- ・福岡市基本計画の情報を緑の基本計画にどのように反映させるのか。
- ・総合計画と個別計画の整合性を取るためにエネルギーを使い、総合計画を軸にしながら緑に関する個別計画を作ること。
- ・計画体系をこれからどうするのか。総合計画を改定し、環境基本計画も改定を控える中、計画相互の関係性をどうするか、早い段階で整理して議論する方がよいと思っている。
- ・生物多様性国家戦略が改定されたので、個別計画では地域戦略を今後どうするかという議論もあろうかと思う。ネイチャーポジティブや Well-being まで含めたかなり幅広い施策をすることが示されている。
- ・都市の緑との関係で再エネとうまく整合できるのかということも、計画間相互で担保をすることが必要。
- ・森林の労働者不足を背景とした将来像などは、福岡市の緑の都市像や緑地の保全活用という観点から総合的に見直す必要がある。農地や林地についてのそれぞれの計画がオーバーラップしているので、コミュニケーションを取りながら整合性ある計画を進めていくことがポイント。生物多様性戦略等の計画と連動しながら質の議論を展開するのもいい。
- ・緑だけでは解決できない環境分野は、他の計画と連携しながら改善しないといけない。
- ・計画の実現には、公園緑地担当部局だけでなく、他部局を含めた(=全庁をあげた)取組みが不可欠で、その体制づくりとフォローが重要。

○人口推移や九州全体・アジアの視点

- ・福岡市は全国の中でも人口が増え続けているので、これまでの計画とこれから10年の計画で緑の量と質についてどのように解釈するか、独特な戦略が必要。昼間人口、夜間人口、アジアからの観光客で緑の役割は異なるだろう。人口が増える中で、福岡市民にとっての緑と観光客にとっての緑を分けずにまとめて検討するのは難しいのではないか。
- ・人口構成に合わせて緑の質をどう高めるかという視点が重要。
- ・福岡市は九州の中での玄関という位置づけがあるので、国交省の国土形成計画との整合性が必要。熊本市など九州内の都市連携も必要。
- ・アジアからの来訪者が緑をどう見るのかという視点も重要。
- ・友泉亭・野河内溪谷・背振山の方がキャナルシティやベイサイドよりも人気があるというデータが出ているが、アクセスが難しく、熊本・大分に行ってしまう。身近な緑へのアクセス強化やクオリティを高める視点が他自治体と比べても足りていない。

○データ分析の結果を踏まえた改定

- ・データを元に専門家で議論すると思っていたが、この検討スケジュールを見るとその議論はどこでするのか。
- ・森林の緑被率は数値としては減っていないが、質としてどうなのか。それぞれの緑は機能や効果の大小も異なるので、数字の増減の中身をしっかりと検証することが大事。現状を調査、分析してエビデンスを持ったのちに、基本方針・基本方向を定めるプロセスが大事。
- ・福岡市の課題としてどのような視点でデータ化が必要なのか、またそれに基づく分析と目標・KPIの設定が必要。
- ・森林計画や他の計画で出ているデータとすり合わせながら見ていくことも必要。
- ・年代別などで表すと、若者はどうか、高齢者はどうかという議論が深まる。
- ・誰を対象に分析を行っていくかという視点が重要。
- ・アンケート結果はどの会議でも悪い結果が出てこない。
- ・次のアンケートでは、NOの内訳が分かるようにやり直してはどうか。何に対する不満なのかを突き詰める設計やデザインが足りていない。

○緑の質・意味の見直し

- ・緑の意味自体も拡張しているので、今回の計画には国が推進するグリーンインフラの考えが大きく入ってくるのではないか。グリーンインフラには、都市の浸水対策、遮熱対策、生物多様性の確保、ゼロカーボン、健康増進、にぎわい創出の全てを含む。
- ・背振の山頂にはブナ林があるが、間の植生はスギ・ヒノキで植生の連続性が欠けており、質という点ではどうなのか。生物多様性、観光などの面からも、緑の質を評価する必要がある。
- ・街路の植込み空間が外来種のネットワークになったり、管理不足で、植栽低木が枯れ込んでいく実態がある中で、緑化のあり方やデザインのあり方自体を問う必要がある。

○健康・安全・子どもなどの個別テーマの扱い

- ・以前と比べると、グリーンインフラ戦略 2023 でも健康というキーワードが強く打ち出された。Well-being をキーワードに盛り込んでいく流れの中でももう少し前面に打ち出した方がいい。レクリエーションの切り口に健康というキーワードを入れて議論できるといい。健康に緑は効果があるということを連動させる必要があるので、その中身を保健福祉総合計画などの関連計画に入れてほしい。ベンチプロジェクトでは、ベンチを作るだけではなく緑を組み合わせることで良い空間になると思うので、連携するとよいのではないか。
- ・公園における防災・避難についてもう少し詳しく書いていただきたい。
- ・持ってきた高木が高く大きくなり草木が繁茂しすぎると、子どもたちが怖くて遊べなくなり（照明灯が見えなくなるなどもあり）、保護者も遊びに行かせられなくなる。現状は、親にとっても公園が安心して遊べる場ではない。緑化は大事だが、子どもたちも大事なのでそこもよく考えて計画を立てていただきたい。
- ・地域における個別事業はとても大切なので、総合計画としてその考えを整理していく。
- ・個別の話をして全体に落とし込むと安直になる場合もあるので、データ分析し総合的に考える必要がある。
- ・緑の役割の「レクリエーションの場の提供」について、健康や賑わい、子育て等の観点の明確化は、今後の官民連携を進めるうえで方向性を明らかにするという視点でも重要。

○民有地へのアプローチ

- ・住宅地でのマンションの更新や新築にどうアプローチしているか。
- ・住宅地の緑に対して何かコミットできるところはないのか。緑の基本計画でも「1本の木を植えましょう」などという表現でコミットしていかなければならないのではないのか。
- ・企業活動や建替え等において、緑の質・量は実際どうなのかは気になるところがある。都市の民間開発におけるあるべき緑化の方法をどう考えるかはもっと強く言うべき。緑の量だけではなく質まで議論の遡上に挙げて KPI の目標を示し、土地所有者や業界の協力を市が自ら求めるなど、他にも色々考えられる。
- ・民有地を都市の自然・緑として加えてどうネットワーク化するかということも議論されているので、OECMなどの視点も入れていただきたい。

○これからの担い手・マネジメント

- ・「これだけの市民が緑づくりに関わっている」ということを自慢としていえるような打ち出し方ができれば、関わる人がもっと増える。
- ・ただ継続されるだけではなく、「どう見せていくか」や「関わりをどのようにして作っていくか」など、今やっていることの編集ができるといい。日本も地域ブランディング・企業ブランディングに取り組み、誇りあるまちになっていく時期でないか。
- ・みんなが楽しんで楽にできる活動が増えるといい。公園愛護会の結成率を増やすことを目的にせず、緑に関わる人を増やすためにいろいろな関わり方を検討するといい。子どもたちも楽しく参加できる仕組み作りをやっていけるとよい。少しだけ関われるという人も参加できるような色々な幅がある枠組みを作れるといい。

- ・公園スケールや都市スケールでのマネジメントについて、誰がどの様な金回りで実施するのか具体化できなければ、「楽しい公園愛護会」のような地域の場づくりは難しい。包摂型の地域づくりのような考え方も出てくるのではないか。
- ・プレイヤーの存在が大事。コミュニティデザイン、愛護会活動、子ども会活動など、人と地域を動かしながら活動をしていることが緑の基本計画の指標として表れてほしい。
- ・一人一花運動は窓口が増えていい活動だが、ソフトウェアの部分はまだ足りていない。ソフトウェアが進むとハードウェアについても考えてもらえて、多様な主体の参加を促す。
- ・一人一花運動は、民有地の緑化が課題になる中、公園以外の緑づくりという切り口でそこに道を開いたものであり、今後強化する必要がある。
- ・企業にとって「緑」は身近な課題として捉えられていない。中小企業が参画する場合の方針を出すなど、企業がいかに参画して一緒に緑のまちづくりに取り組むかが示されれば働きかけやすい。

○策定プロセスの重要性

- ・緑が足りているかどうかなどについては、考え方をアニュアルレポートのようなもので市民に伝えているのかということの方が大きい課題だと感じる。隣に公園があっても緑が少ないと感じている人もいるかもしれない。
- ・点検評価の方法を盛り込んだ方がいい。毎年のレポートとして、計画の内容と進捗状況を報告できるといい。
- ・どういうところに親しみを感じていないのか。「公園に親しみ」とあるが「緑に親しみ」だと結果は変わってくると思う。物事を考えるとき、親しみを持つことが第一歩であり、そのようなマインドも大事。
- ・今の時代、計画は「市民と一緒に作っていく」ものなので、情報が改善するように作ってみてはいかがか。インセンティブを設計することで参加する人がさらに増えるという循環がデザインできれば、日本で一番いい計画になると感じる。
- ・現状の緑の基本計画では、方針の部分は分厚いが、計画の推進方策は後ろに薄く載るだけなので、次の計画ではこの推進方策を分厚くしたい。福岡市独自の指標を設定し、それをみんなで達成していくようなところにオリジナリティーをつくと、全国から参考にされる福岡市の緑の基本計画になる。
- ・市として条例等を使いながらどのようにやっていくかを考えることが重要。
- ・トレードオフが生じることは様々な場面で起こり、これをいかに解消するかが重要。さらに、トレードオフの解消だけではなく相乗効果を狙って2つの施策を同時にやることも重要。
- ・基本方向の6項目はすでに決まっているものなのか。これだと協働と安全・安心はくっついて議論しないといけない。